

Chaising

第一速 車嫌いのクレイジードライバー

このストーリーはフィクションであり、実際の人物や団体とは関係ありません。

カーチェイスの描写がありますが、現実で行うと重大な事故につながる恐れがあり

非常に危険です。決して真似をしないで下さい

第一速 車嫌いの男

第二速 キズだらけのスカイライン

第三速 キズつく前のスカイライン

第四速 因縁のドッグファイト

第五速 苦し紛れの車嫌い

第六速 嵐のダウンヒル

マニアック用語解説

マニアックな用語が使われている今作、解説をして、ストーリーを分かりやすくします。

第一速 車嫌いの男

深夜0時過ぎ。一人の女子大学生が夜道を歩いていた。彼女の名は佐々木夏美。(ささきなつみ)金欠のため深夜のバイトをしていたのである。歩行者用信号が青に変わり歩き出した佐々木、と信号無視の車が近づいてきた。全く減速する気配がない。避けることが出来ない、、佐々木はそう思った。

そんな状況をサイドミラー越しに見ている者がいた。彼の名は奥留郁真。(おくどめいくま)公道でドリフトや速度超過などを行う車を取り締まる業務を警察から任された追跡業務受諾者である。彼は追跡業務の為に、ドリフトや、破壊行為が人を巻き込まない範囲で許可されている。そんな彼は物陰に隠れて危険な運転をする車がないか見張っていたのである。彼はエンジンを掛けると、車体に無数の傷があるスカイラインを駆(はし)らせた。佐々木を避かわしてドリフトで道を塞ぐ。車を盾にしたのである。ガリッと鈍い音が出て、車が停まった。奥留が車から降り、暴走していた車の運転手を引きずり出した。そこへパトカーもやってくる。「奥留君、ご苦労様。」そう言ってパトカーから降りてきた刑事が声をかける。「上地刑部もご苦労様です」奥留も答えた。上地(かみち)は生活安全課の刑事で、地元住人を危険に晒す車を奥留と共に追っているのだ。「なかなか目標の車は見つからないな。」「焦らずにやってくしかないな。」上地が奥留に話しかける。「そうするしかないですよね。」奥留も答えた。上地は署に犯人を連行し、車も署に持って行つた。残されたスカイラインを見て奥留は、「擦られちゃったか。」と呟いた。暴走車を止める為に道をふさいだ時に接触し、スカイラインの側面には大きなキスが出来ていた。しばらく何が起こっているのか分からずに立ち尽くしていた佐々木だが、奥留が助けてくれた事が分かりお礼を言おうと奥留に歩み寄った。「助けていただきありがとうございます。」と、「礼なんかいらねえ。」と奥留は答えた。「そのキズの修理、、」と佐々木が言うと、「直す必要はねえ。」と奥留が答えた。「大事な車なんじゃ」と聞く佐々木、奥留は「俺は車が嫌いなんだ。」と答え、スカイラインに乗り込み駆り去った。

スカイラインのルームミラーに車のヘッドライトが映った。峠の頂上に誰かがいるようだ。ここ数日毎日である。奥留は気にかけていた

峠の頂上には、一人の男がいた。「あれはいくのおっちゃんのスカイラインだな」「乗っているのは息子か？」と呟いている。彼の横には、赤ベースで、リトラクタブルヘットライト、ウイング、ミラーが黒いスポーツカーが停まっていた。車体の側面には大きなキズが。何か裏がありそうな人物である、。。。

第二巻 傷だらけのスカイライン

翌日、深夜0時過ぎ、佐々木は昨日と同じ場所にいた。まともにお礼を言えなかった奥留を探していたのだ。と、一台の車が峠を下って来る。あの車は、「佐々木はその車に手を振った。だが、近づいて来た車を見た佐々木は何かが違うことに気が付いた。車のタイヤがハの字になっている。こんな車じゃなかったような、そう思った時、彼女の目の前に停まった車からガラの悪い二人の男が降りてきた。「おい姉ちゃん、せっかく気持ちよく駆っていたのに邪魔すんなよ。」一人の男が言う。「まあ落ち着けよせっかくだし、人でドライブでもしようぜ。」ともう一人の男が近づいて来た。「やめてください。」と佐々木は叫んだが、力尽くで車に乗せられた。

一方、その頃、奥留は峠の頂上のヘッドライトの正体を知ろうと峠を登っていた。そんな中、車高を違法に下げた車とすれ違った。「ちっ、邪魔が入りやがった。」奥留は舌打ちをしながら車をUターンさせ、後を追い始めた。サンバイザーについた赤色灯を点灯し、「おい、その鬼ギャンの車止まれ」とマイクで指示を出したが、止まる気配がない。鬼ギャンの車の男は、「パトカーがついて来れるかな？」と舐めた態度を取っていた。一気に加速する鬼ギャンの車、しかし、タイヤをハの字にしているため、ハンドル操作やブレーキ操作が効きにくい。コーナーでふらついて、目も当てられないぜ。」奥留はつぶやく。スカイラインは一気に接近した。鬼ギャンのサイドミラーに映るスカイラインを見て態度が一変した。「まずいキズだらけのスカイラインだ。」一人の男が言った。「あの違反車を取り締まるヤバイ車か？」もう一人の男も慌てている。鬼ギャンの車は川沿いの一本道へと入った。と、奥留は「対向車線入るぞ」「対向車止まれ」と指示を出す。「まさか飛び越し走法か?」「ま、まさか、」暴走族二人は慌てている。その時、ガシャンと鈍い音がして、ガードレールが飛んだ。そしてスカイラインが川の向こうの対向車線に飛び移った。その直後、スカイラインが鬼ギャンの車の前に飛び移ってきた。思わず急ブレーキを踏み、鬼ギャンの車は停まった。上池に二人を引き渡した奥留、と、佐々木の

姿が目に入った。「何でこの車に乗っている？」奥留は尋ねた。「昨日のお礼を言えなくて、お礼を言いに来たら、黒いスポーツカーが来たので間違えて。」と答える佐々木。「どかが俺のスカイラインと似ているんだ？」「こんな不正改造車と一緒にしないでほしい。」と奥留は言った。そして、「用があるならガレージに来い。この辺はふざけた走りをする奴がいる。犠牲者だって出ている。」と言い残し駆り去った。バックミラーには今日も謎のヘッドライトが映っている。

第三速 キズつく前のスカイライン

奥留の渡した名刺に書かれたガレージに来た佐々木。そこは、廃墟のようにボロボロな整備工場だった。半開きのシャッターをくぐると、スカイラインのタイヤを付け替えている奥留の姿があった。「車の手入れされてるんですね。」「やっぱり車が好きなんじゃない？」と尋ねると、「しつこい奴だな、俺は車が嫌いだと言っているだろ。」と奥留は答えた。

「じゃあどうして手入れを？」と尋ねると、「商売道具の手入れをして悪いか？」と返して来た。「俺の駆りは足回りを酷使する。エンジンもかなり回転させる。」「エンジンとタイヤをいじめている状態だ。」「エンジンオイル交換、ブレーキパッド交換にタイヤ交換をしねえとスカイラインをつぶしてしまう。」と答えた。「車体のキズは取らないんですか？」佐々木が尋ねると、「車体のキズは駆るのには問題ねえ。」と奥留が答えた。

車の手入れをしているのに、車体のキズは気にしない。それに車が嫌い。何だか矛盾の多い人である。

「俺は峠の上から見下ろして来るヘッドライトの正体を追っている。」「悪いが、お前と遊んでいる暇はねえ。」と言い残しスカイラインで走り去った。

「人残された佐々木、ガレージ書類が散らばっているので片付けることにした。書類をどかすと、スカイラインのミニカーと、奥留が父親らしき人物と写っている写真が。そこにはキズが付いていないスカイラインも写っていた。「車嫌いには見えないんだけどな、」佐々木は呟いた。そして、足元に原付が倒れている事にも気が付いた。「やっぱり乗り物好きに見えるけどな、」佐々木の謎は深まるばかりである。

一方、奥留は、謎のヘッドライトの正体を追って、峠を登っていると、またも邪魔が入る。前を駆る車がドリフトをしたのである。「公道だぞ、分かってんのか?」「おい、そのドリフトした車止まれ。」と呼びかけるも聞く気配はない。「仕方ねえ。」と奥留はスカイラインで斜面に乗り上げた。ハンドル操作でわざとバランスを崩し横転、相手の車の前に一回転して着地した。「くそっ、計画的横転か。」後ろの車は急ブレーキを踏むしかなか

なった。上地に運転手を引き渡した奥留、今日も峠の上からヘッドライトが照らしている、。。。

第四速 因縁のドッグファイト

ガレージに戻った奥留、すると佐々木が写真とミニカーを渡してきた。「書類の下に埋まってきました。」と言うと、奥留は、「余計な事すんじゃねえ。」と怒鳴った。そして、写真とミニカーを投げ捨て、ミニカーもゴミ箱に捨てた。バキッと音がして、写真立てが割れた。明らかに奥留は動揺している。「出ていけ。」と奥留は佐々木に言い放った。「俺は車が嫌いだ。」と言っている奥留、だが、自分に言い聞かせているように思えた。佐々木は、写真とミニカーを投げ捨てる時、奥留が一瞬戸惑っているのを見たからである。佐々木は後ろ髪を引かれる思いで、ガレージを後にした。

その夜、佐々木はネットを使って謎のヘッドライトの正体を調べていた。奥留の為に何かしたい。助けられたあの日からずっと思っていたのである。そんな中、あの投稿が目に残る。「謎のスポーツカー」毎晩、0時頃に峠の頂上から何かを見下ろしている謎の男と、赤いスポーツカーがある。これに間違いない。そう思った佐々木は、その投稿をコピーし、翌日ガレージのポストに入れた。

ポストの音に気付いた奥留、一体誰からだと思いをかき上げる。この錆びれた整備工場に人が寄り付くはずがないのだが、、、、ポストに入れられた写真を見た奥留は、顔色が変わった。ミラー、リトラ、ウイングが黒いこの車、、、、間違いない、、、、深夜0時頃に峠の頂上にいる。なら先回りして待ち構える。奥留は、スカイラインで峠を登り、途中の物陰に隠れた。ヘッドライトを消して黒い車体が夜の闇に擬態する。

「今日はスカイラインは来なかったな。」謎の男は赤いスポーツカーで峠を下っていた。すると物陰からスカイラインが飛び出してきた。強引に幅寄せをして停止を試みる。そのままコーナーに入った。「なかなかのセンス」「面白い、一度下がってみようか」謎の男は少しブレーキを踏み後ろに下がった。奥留が停止しようとした時、車を左右に振って圧をかけてきた。異常なほど、車間距離が詰まっている。「煽ってきやがる。」奥留が呟いた。その時、強引に追い越したのだ。「追い越し禁止区域でふざけんじゃねえ。」「逆走し

てるのわかってるのか？」奥留はギアを上げた。しかし、相手の車の方が圧倒的に勝っていた。逃してしまったのだ。

ガレージには佐々木がいた。様子を見に来たのだった。そこにスカイラインが戻ってきた。声をかけようとしたが、「邪魔だ、どけ。」と言うとスカイラインをガレージに入れ、シャッターを閉めてしまった。1人残された佐々木、そこに一台のパトカーがやってくる。乗っていたのは上地である。「君、ちょっといいか？」上地は佐々木に声をかけた。

第五速 苦し紛れの車嫌い

「奥留君は元々警察だったんだ。」「俺の部下だった。」「お父さんは車屋のおっちゃん、その影響で元々は車が好きだった。」上地は言った。「じゃあどうして車嫌いに？」佐々木が尋ねた。「おっちゃんが事故で亡くなったんだ。」「彼はルールを破る車乗りが嫌い、ね、ルールを守れない車乗りは車好きを名乗れない、それが口癖だった。」違法改造や暴走行為は断じて認めなかった。「それで、イベントで峠を攻めるときも、警察に許可を得ていた」「だけど、ルールを守らない奴がいた。その車を止めに行った時に谷底に落とされた。」「それ以降、彼は車嫌いを名乗っている。」「奥留君が乗っている車は、おっちゃんの車、突き落とした車が謎のスポーツカー、このガレージは、元々車屋だった場所だ。」「誰より車が好きで、でも誰より車を憎んで心底ルールを破るドライバーを許せない。」「そんな彼は、謎のスポーツカーを追うために警察になり、その後、独立して、今は追跡業務受諾者としてその車を追っている。」「俺は奥留君がどれだけ感情的になっても人を傷つけないことを知っている。それが緊急走行の許可証を渡した。」「こうして協力しているのは、おっちゃんを守れなかった自分への反省があるんだ。」上地は言った。「奥留君の車嫌いは苦し紛れなんだ。」「心の底では誰より車が好きなこと、好きでいいんだと言うことに気付いて欲しいと思っている。」佐々木は、「奥留さんに私はどうしてあげればいいんでしょうか？」と尋ねた。「今はそつとしくのが一番だろう。」「誰よりつらい思いをして、それでも立ち上がっていけるのが奥留君だ。谷底におちて、キズだらけになっても再び駆り出したおっちゃんの魂の宿るスカイラインと奥留君なら謎のスポーツカーを捕まえる。」「俺はその時まで全ての力を使って協力する。」上地の声がパトカーに響いた。二人はパトカーでガレージを後にした。

事務所の二階にある散らかった部屋に奥留は寝転んでいた。思い出すのは彼が高校生だった頃。学校から帰るとスカイラインが店先に停まっていた。「もしかして新車？」奥留は興奮して聞いた。「ああ、ようやく手に入れたスカイラインだ。」父親の奥留郁が言っ

た。奥留自身もミニカーのコレクションでスカイラインを手に入れて気に入っていた。それを見た奥留郁が買って来たのだ。その時、黒いリトラ、ウイング、ミラーの付いた赤いスポーツカーが店に入ってきた。そう、これが、「謎のスポーツカー」と初めて出会った日である。

その夜、ニュースでそのスポーツカーが暴走している事を知り奥留郁は止めに行った。帰りが遅いので奥留は原付で様子を見に行った。ガソリンの匂いが鼻をつく。嫌な予感当たってしまった。スカイラインが谷底に落ちていた。車体にキズの付いた謎のスポーツカーが駆り去る。あの日の事を思い出した奥留の目には涙が、、。

第六速 嵐のダウンヒル

翌日、奥留はスカイラインに乗り込み峠へと駆っていた。あの車をずっと追ってきた。今度こそは逃がさない。そんな覚悟で大荒れの天気の中を進んでいく。昨日と同じ場所に隠れた奥留は車から降り、頂上の様子を伺った。遠くの方から車のエンジン音が聞こえてきた。奥留はスカイラインに乗り込んだ。サイドミラーを伝っていた水滴がはじかれる。まるで奥留の涙を振り払うかのように、。水溜まりの水をはじきながら飛び出したスカイライン。謎のスポーツカーの後ろに張り付き、フロントガラスに打ち付ける雨を払いながら進んでいく。タコメーターがレッドゾーンに上がり、温度計の温度も上昇していく。スカイラインは今、奥留の心とシンクロしているのだ。今、奥留の感情は頂点である。そして、あの涙を降りはらって進んでいるのだ。前を駆る謎のスポーツカー、風をもろに受け思うように加速できない。一方スカイラインは謎のスポーツカーを風よけにしてエンジンを暖めている。奥留は更にタイヤを高速回転させ、ハイドロプレーニング現象を起こした。水の膜の上を滑るように駆るスカイライン。「馬鹿な、ハイドロプレーニング現象の中で駆り続けられるだど？」ミラー越しに見ていた謎の男は言った。コーナーにさしかかると。謎のスポーツカーのブレーキランプが光る。一方スカイラインはノーブレーキで突っ込んだ。サイドブレーキを引き、スピンする手前のハンドル操作により水の膜の上を滑りながらドリフトをしたのだ。その先のコーナー、ガードレールに車体をぶつけて、その反動で再びドリフトをした。謎のスポーツカーはタイヤをイジメた事によりふらつき始めた。「今だ」奥留が言う。ガードレールを吹っ飛ばして前輪を片方浮かせた状態で車重をハンドル操作でコントロールし、ドリフトをした。「こいつ、どうなってやがる？」謎の男が言った。窓の向こうに奥留の顔が見える。「同じ目だ」謎の男が呟く。奥留郁が止めに来た時とまったく同じ目でこちらを睨んでくる。幅寄せをされ、思わずブレーキを踏み謎のスポーツカーが停まった。奥留も謎のスポーツカーを追い越した先でブレーキ、水の膜を切って制止した。「お前のドラテクはすごいな。」謎の男の言葉で奥留の怒りは沸点に

達した。「ふざけるなよ、危険な運転を繰り返す奴がドラテクなどを語るな」「俺はな、あんたらを止めるために許可とってんだよ。」「何があっても人を傷つけない約束でな。」「人を傷つけるようなら車に乗るな。」「だから俺は車が嫌いなんだ。」「あんたらを捕まえて、刑部に引き渡したらスカイラインともおさらばだ。」と言った。「ちょっと待って。」そう言って駆け寄ってきたのは佐々木である。「刑事さんから聞きました。昔は車が好きだったんでしょ?」「その車だって大事なものでしょ?」「本当に手放していいの?」奥留に問いかける。「しつこいな。」佐々木に奥留が言う。「後で後悔して欲しくない。」「佐々木は言った。「俺がふざけた運転したからなんだ。」「サーキットに行くとか、他の方法をしなかった俺が悪い。」「車は悪くないんだ。分かってくれ。」謎の男は言った。上地が、「好きなものは好きでいいんだよ。」と声を掛け、ミニカーと写真を渡し警察署に戻った。

激しく雨の降る峠道にスカイラインと奥留が残された。ボンネットに手を触れる。車体のキズで手が切れた。その痛みで奥留は我に返った。父親とドライブに行った事を思い出したのだ。「大切だった、大切だったはずのスカイライン、。」「奥留は呟いた。

数日後、ガレージでスカイラインを弄る奥留がいた。ツインターボをつけて、タイヤ、バンパー、サイドステップがベージュになっている。スイッチを押すとウイングが出てきた。「さて、ドライブにでも行くか。」奥留は笑顔でスカイラインに乗り込んだ。

マニアック用語解説

リトラクタブルヘッドライト

自動開閉式ヘッドライトの事、空気抵抗を避けるために車高を下げた結果、法律に定められたヘッドライトの高さを下回ってしまい、ボンネットから突き出た形の構造のヘッドライト。突き出たヘッドライトが空気抵抗を生むので夜間以外は仕舞われている。事故時に尖ったパーツが危険なため現在は生産されていない。2024年8月14日現在。

鬼キャン

タイヤを法律で定められた規定を超えてハの字にした違法改造車。

タイヤをイジめる

タイヤに負担をかける事 ドリフトでは前輪に車重が乗り、負担がかかるのでそのように言う。

ハイドロプレーニング現象

タイヤを高速回転させる事により水の膜が出来る現象。雨天時などに起こる。現実世界で行うと、車のコントロールが出来なくなり危険である。

ダウンヒル

下りの峠を高速走行する事

ドックファイト

先行後追い型のレース形式

レッドゾーン

車のエンジンの回転数を示すタコメーターの高速回転域に赤く示されているエリア。

